

E-9 老人の勤労観 (第1報) —京阪地区の場合—

金蘭短大 ○藤原 冬

知洋女大文家政 酒井ノブ子

目的 筆者らは昭和50年以来、女子学生、中高年主婦、中高年男女の勤労観について実態調査を行い、その結果は家政学誌及び本学会において逐次報告を行ってきた。今回は老人男女(60才以上)に視点をあて、その勤労観の特質を明らかにしようとするものである。

方法 調査時期は54年12月～55年3月で、対象は寝屋川市在住の老人、某老人団体に属するもの、大政主婦の会等の老人とその夫、及び京都市の老人センター(この家の王を利用しているもの、京都市近郊の老人で、質問紙を配布し説明を行い、約1週間留置、回収の際記入不備の部分は聞き取りによって補足した。質問の内容は従来と同じで、老人向けに平易に書きなおした。配布数270部、回収率93%250部、有効率98%245部(男子98人、女子147人)を得た。

結果 質問9項目に対し、男女別では勤勉の項目の他は有意差は認められず、年令別(60代70代80代)では勤労及び仕事関係と余暇関係の項目に有意差を認め、勤労意欲は60代が最も高く、80代では仕事も余暇も意志表示がなかつた。学庁別では、勤勉の項目以外はおべてに有意差が認められ、特に生き甲斐の対象、生活規範の項目に、高学庁者は明確な意志表示をし、自己の生活をたのせつにし、仕事や勉強に励みつつ、自己向上を求めていることがあつた。又現代人の余暇行動に対しても、はつきりした批評をくだしている。以上総合してこの調査では、男女差年令差は少く、学庁差による違いが多く現れていた。なお、家族形態が核家族であるか拡大家族であるかによつても、多くの項目に有意差がみられたが、これについては、今後の問題として再検討したいと思つている。